

今日は、復活前主日です。今年の大齋節もあと1週間になりました。大齋始日から、紫色の祭色で礼拝してきましたが、今週は、イエス様が十字架に架けられる、ということで、イエス様の流された血の色である赤を1週間続けることとなります。そして木曜日の夕方、聖餐式を制定された記念の礼拝の時だけ、お祝いの白になるのですが、翌日の金曜日は、イエス様の服が脱がされる、ということで、礼拝堂のキリストの体を表す祭壇からも、一切の装飾を取り去ってしまうのが、教会の習慣として残っています。

さて、今日は「聖週を守る」ということで、説教をしているのですが、イエス様が十字架にかかった週には、日曜日からその次の日曜日まで、毎日どんなことがあったか、教会はどのように教えているか、お話ししたいと思います。

先ず日曜日。この日には、今日の礼拝の最初にあったように、エルサレムにイエス様が入城されました。エルサレムの町の東側にはオリーブ山という山があって、そのふもとはゲツセマネというところがあります。ゲツセマネとは「油絞り」という意味ですから、この山で採れたオリーブを絞って、オリーブ油をつくっていたのでしょう。そのゲツセマネとは反対側。オリーブ山を越して、東に行ったところにベトファゲやベタニアという村があって、イエス様はよくそこに立ち寄られたのでしょう。そして、ベトファゲの村からイエス様はロバに乗って、オリーブ山を越してエルサレムに入られたのでした。その時、イエス様を歓迎するために人々が、ナツメヤシの枝を手を持っていたのを、再現するのが復活前主日、棕櫚の日曜日の伝統です。

その次の日、月曜日は有名な宮清めをした日です。エルサレムの神殿には、一番外側に「異邦人の庭」というのがありました。エルサレムの神殿は世界のあらゆる人に開かれていましたが、ユダヤ人ではない、外国人が入れるのは、一番外側の「異邦人の庭」までなんです。ここが一番広い。その内側には「婦人の庭」がありました。ユダヤ人でも女性はここまでなんです。そしてその内側に「イスラエルの庭」があり、ユダヤ人男性はここまで入れる。そしてその内側が、祭司の庭ということになります。祭司たちは普段神殿の聖所まで入れますが、一番奥の至聖所には、大祭司が1年に1回だけ贖罪日に入れる。

ところで、イエス様が両替人や鳩を売る人たちの台をひっくり返して大暴れしたのは、一番外側の庭なんです。外国人はここまでしか入れないのに、外国人が静かに祈ることもできないほど、ここで商売している人々が我が物顔で生活していたのです。それをイエス様が怒った、ということです。そして、この行動がイエス様を殺す陰謀の直接の理由だと言われています。

さて、その次、火曜日は、前日大暴れしたイエス様をとっちめてやろう、と祭司長、民の長老、ファリサイ派やサドカイ派、などが次々とエルサレムの神殿でイエス様に議論を吹きかけていきます。

この火曜日は、議論の火曜日と呼ばれています。皇帝への税金の問題。復活についての論争など、多くの議論がこの火曜日には行われました。「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい。」というのもこの時イエス様の口から出た言葉でした。

さて、日曜日にロバに乗ってエルサレムに入ったイエス様は、神殿で月曜日、火曜日と、注目を集めるような行動をしたのですが、水曜日はベタニアというエルサレムの東の山の向こう、オリーブ山の東側にある町の、マルタとマリヤそれにラザロの兄弟が住む家に一日居て、静かに過ごされました。黙想の水曜日と言われます。

そして、木曜日はエルサレムの町の中で、最後の晩餐をされました。弟子の足を洗ったのもこの時です。そしてオリーブ山のふもと、ゲツセマネの園に行き、そこでイスカリオテのユダの導きで、逮捕されたのです。

夜中から朝にかけて裁判が行われ、十字架刑が決まると、朝9時頃に十字架に付けられた、とマルコによる福音書は書いています。ヨハネによる福音書ではもう少し後になるのですが。このマルコでは12時ごろには全地が暗くなり、3時に及んで、イエス様は息を引き取られたと言っています。

それから、日没まで、あまり時間がなかったのでしょう。安息日になる前に、急いで遺体を墓に納めた。そして翌日は日没まで何もできないから、日が沈み安息日になってから、遺体に塗るための没薬や沈香などの香料を買った女性たちは、翌朝、日曜日の朝に、アリマタヤのヨセフのものだった墓に入ったイエス様の所へやってきて、墓が空っぽであることに気づいた、ということです。

さて、このような一週間を私たちもイエス様と同じように体験しようとするわけですが、その目的は何でしょうか？

それはこの棕櫚の枝が教えてくれています。元々、これは日曜日にイエス様がロバに乗って、都のエルサレムに入られるのを歓迎する、イエス様の追っかけファンの印でした。主役は他におられる。ところが、私たちは金曜日には、十字架を背負われ、磔になったイエス様の気持ちになって黙想するのです。

つまり、日曜日、イエス様を都に迎えたように、私たちの中心にイエス様をお迎えし、金曜日には、私たち自身がキリストになって、人々の重荷を負う者に変えられてゆくことです。

その、私の身に起こる変化を、パウロは次のように言っています。

『生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。』
(ガラテヤ2：20)

私たちは、この聖週を通して、イエス様をもっと身近に感じて、キリストを生きる者になりたいのです。

聖歌の563番は、たいへん単純な聖歌ですが、こんな歌詞になっています。

「わたしはなりたい キリストを生きる人に わたしはなりたい キリストを生きる人」

この言葉をかみしめて、今週の聖週を守っていただきたいと思います。